［第四話］

塙保己一

ヘレン・ケラーが、昭和十二年初めて来日したとき、まっさきに渋谷の温故学会（保己一の学問を継ぐ研究所）を訪問して、保己一の木像にふれ**「私は塙先生のことを知ったおかげで、障害を克服することができました。心から尊敬する人です」**と感謝の言葉をのべたことはよく知られています。

盲目の身で大学者となり、有名な「群書類従」という古典全集を編集刊行した塙保己一は、現在の埼玉県児玉町に生まれました。

三歳ころから眼病にかかり、七歳のときには失明してしまいました。はりやあんまなどのわざを身につけようと江戸に出ますが、さっぱり上達しません。

その代わり学問が大好きだったので、それをみとめてくれた師匠や、まわりの人びとの手助けを得て学者への道を進みます。血のにじむような努力です。

水戸藩や幕府の後援を受け、和学講談所という、今でいえば国学研究の学校を開き、たくさんの弟子を育てます。「**群書類従**」は、わが国の古い貴重な文書が写本のままで一部しかなければ、焼けたり紛失したりするおそれがあるので、印刷（木版）して全集のかたちにし、後世にたいせつに伝えようという、保己一の発案でした。

独力で巨額の費用をくめんして、四十年の歳月をかけ完成します。第一話の水戸光圀「大日本史」は、二百六十年の歳月・数千人の協力によってできた大事業でしたが、こちらは盲目の学者ひとり（もちろん支援者は多数いますが）の力による、「大日本史」におとらぬ大仕事であります。

今の大学にあたる和学講談所の経営や類従出版の功績をみとめられ、保己一は総検校（盲人の最高位）となり、農民の出身ながら旗本なみの待遇を受け、将軍にお目見得を許されました。

かつて保己一が源氏物語の講義をしていた夜、風のため灯が消え、弟子たちが

あわてて「先生、ちょっとお待ちください」と申しました。事情を知った保己一がいうには、「**さてさて目あきとは不自由なものだなあ**」

「群書類従」の版木（文字を彫った印刷用の板）は、一万七千二百四十四枚で、国の重要文化財に指定され、今も温故学会に保存されています。

ヘレン・ケラーは、ご承知のように三重苦（盲聾唖）を克服して、大学まで卒業し、障害者の福祉に貢献した人です。どうして塙保己一のことを知っていたのでしょうか。

電話を発明したグラハム・ベル博士は、祖父・父・本人と三代続いた唖者教育一家でした。ヘレン・ケラー六歳のとき相談を受けたベルは、家庭教師としてサリバン女史を紹介し、両親に保己一のことを語ってきかせました。

ヘレンが生まれる少し前のこと、ベル博士のもとで学び、塙保己一についてくわしく博士に話した日本人留学生がいたのです。伊沢修二という青年で、のち文部省高官・教育者（信州高遠藩出身・音楽教育や盲唖教育に力を注ぐ）として著

名な人です。「紀元節」の歌の作曲者でもあります。

ヘレンが感動したように、保己一の話に今も励まされ勇気づけられる多くの人がいるにちがいありません。

文政四年（一八二一）七十六歳没

○ あの有名なヘレン・ケラーが、心から尊敬をする人物とは……。
日本には凄い人がいたものです。初めて知りました。

○ 「さてさて目あきとは不自由なものだなあ」の名言に感心。
実際に目で見えても、見えないものが多い私です。

（M生）